

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
主 席
研究員17
都市の景観を
考える

日本橋の再生計画には及ばずとも、市街地を流れる用水を整備改修して、そこに風情あるレストランや若者達で賑わうオープンカフェ、そして路地裏に入ると幅にして一尺足らずの水路（みずみち）がせせらぎを醸し出してくれたら、どんなに心安らぐだろうと筆者は想像するのである。

当然、関係機関との多くの協議や合意形成により実現するものであるが、是非行政にその発動の指揮を執っていただきたいと考える。

本章の中では、今まで縷々都市景観を語るうえでの物質的景観の造形について、具体的

事例を挙げて語ってきた。ここからは、少しの間「心理的景観の造形」という観点から都市の景観を考えてみたい。

先に述べたように、都市の景観を語るうえで、物質的なそれと心理的なそれとは表裏一体のものである。

そして、それはとりもなおさず、そこに暮らす人々が快適で、心豊かな人生を謳歌（おうか）するに足る都市を造る一つの有効な手段と筆者は考える。

読者もご存知のように、日本は世界でも指折りの長寿国であり、中でも、長野県は全国屈指の長寿県を誇っている。

そしてさらに欲をいえば、長寿の真の根源は「健康寿命」であり、それこそがすべての人々が求めてやまない人生の謳歌であり、真の天寿全う、ピンピンコロリ（PPK）である。

しかしながら、現代は残念なことに、男性は平均9年、女性は12年も介護された後に最期を迎える、つまりはネンネンコロリ（NNK）というのが現実の姿である。

そういう意味では、他国に対して決して長寿を誇れる国ではない

し、むしろ「不健康長寿国」といった方が当てはまるかも知れない。それならば、NNKを避け、PPKをどうすれば実現できるのだろうか。

その基本は医療に頼り過ぎないこと、そして自らの健康は、まず自らの責任をもって保つことである。

そして、そのうえで生きがいという本来人間が持ち合わせる気概を醸成する支援環境を社会が整えることであると筆者は思うのだ。

そうした意味で、住むまちの環境、景観の整備というものは、大変重要な役割を持つとともに、単に無機質な都市・まちを造るのではなく、そこに息吹を感じることのできる景観という要素を注入することが肝要となるのである。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）195

2年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長